

平成 21 年 5 月 14 日現在

研究種目：基盤研究 (B)
 研究期間：2007～2008 年
 課題番号：19404018
 研究課題名 (和文)：台湾原住民の集落空間と固有文化からみる集住環境の構成原理に関する研究
 研究課題名 (英文)：A study on the village space of Taiwan aborigine and composition of the principle of the peculiar culture

研究代表者：齊木 崇人 (SAIKI TAKAHITO)
 神戸芸術工科大学・芸術工学研究科・教授
 研究者番号：90195967

研究成果の概要：本研究は、台湾原住民族の伝統的民族観について現地調査を通して比較考究し再評価したものであり、集落空間・色彩・図像研究の複合的な専門領域からのアプローチを試みてきた。集落空間の分野では、集落の立地選定と居住形態の構成、生活環境と立地特性を明らかにした。色彩の分野では、居住環境の色彩特製、服飾の色彩と配色、染織工芸について時代的変遷と地域特性を明らかとした。また、図像の分野では 8 民族の伝統服飾の形式と種類、船装飾について地域文様図像の特性として明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2008 年度	2,800,000	840,000	3,640,000
年度			
総計	6,400,000	1,920,000	8,320,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：都市計画・建築計画

キーワード：台湾原住民、集落空間、固有文化、立地選定、色彩環境、伝統服飾、文様、図像

1. 研究開始当初の背景

本研究メンバーはこれまで中国・台湾・韓国・沖縄(八重山)など、東アジアの集落・居住空間について比較研究を進めてきた。その中で、近年まで閉鎖され調査が困難であった台湾原住民について、その固有の文化を背景に形成された環境観や集住空間の重要性を認識するに至った。台湾についてはこれまで漢族の三合院の住まいや集落空間について研究を進めてきたが、その過程で 17 世紀初頭に平地から山地への移住を余儀なくされた原住民との関係は、現在までの台湾史の視点から見ても非常に重要な課題であると考えられる。台湾原住民独自の文化や空間が現在までどのようにあり続けてきたのか、自然観や住まい観を明らかとし、時代を経て生き続けてきた固有の文化・環境の仕組みを探る。

2. 研究の目的

本研究は、台湾の山間部に居住する 13 民族の台湾原住民を対象にそれらの集落立地選定と環境観、集落空間の集合システムを、伝統的居住空間が持つ環境と空間形成技術と捉え、集住環境の構成原理として探究すること、そして地域固有の伝統的デザイン要素(色彩・文様)の構成原理を明らかにし、現在に至るまでの約 400 年間の持続と変容のプロセスを考究し、その成果を台湾原住民の地域コミュニティと地域研究者に還元することを目的とする。

3. 研究の方法

日本統治時代、台湾原住民に関する研究は多くの民族学者、人類学者、民俗学者達によって調査・研究されてきた。それら先人達が残した資料や地図を手掛かりに、台湾原住民の伝統集落や居住空間の構成原理に見る 1. 立地環境(ところ)、2. 生活・文化(営み)、3.

建築(かたち)に主眼を置き、集落と居住空間、伝統的デザイン要素について明らかにする。本研究では台湾原住民の多様な住まいや伝統的デザイン要素について多様な集落を踏査できるよう、現地の研究協力者と連携を取りながら調査ルートの設定を行った。その結果、新竹縣、苗栗縣、嘉義縣、南投縣、屏東縣、台東縣、花蓮縣に分布する 24 集落を調査対象地域に選定した。(図 1)

調査期間は 2007 年 12 月 20 日～26 日、2008 年 6 月 19 日～25 日、12 月 24 日～27 日の計 3 回に及び、建築学のみならず地理学、民族学などの多角的な視野を持って複合的な領域から現地調査を行った。

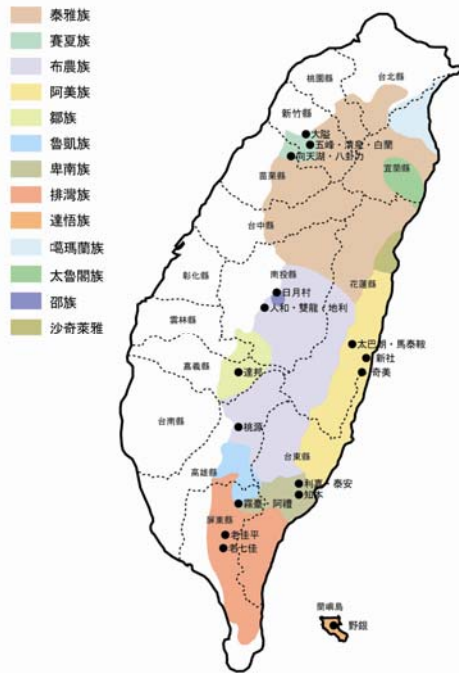


図 1. 原住民分布及び調査集落図

4. 研究成果

(1) 集落立地と居住形態

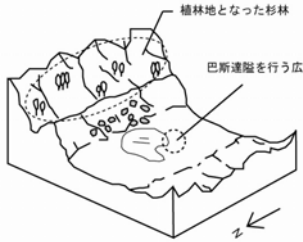


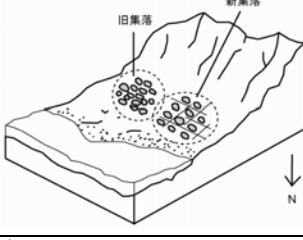
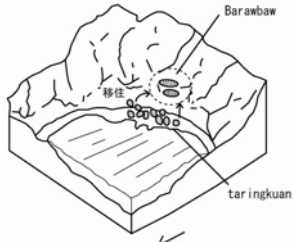
本研究では、台湾原住民の場所選定とその地理位置及び自然環境から見た特性把握調査として、10 民族の概要と訪地した 25 集落の歴史、立地状況、集落規模、建築について、現地調査で得られた資料と文献によりその内容を明らかとした。

台湾原住民集落は魯凱、排灣、布農、泰雅、鄒、賽夏族の山地居住民族、卑南、阿美族の平地居住民族、達悟族の島嶼居住民族の三つに大きく分けられる。これらは集落の立地、生業、地理観・環境観など全ての面で影響を与えるものと考えられ、山地居住民族は「山・尾根居住・狩猟採集系」、平地居住民族は「平地山麓・平野段丘居住・農耕系」、島嶼居住民族は「海・島嶼居住・漁労系」に分類することができる。なお、日月潭に居住する邵族は期限が山地系民族であるが、日月

潭の環境に適応し湖畔に居住する形態に特化しており、特殊な生活環境であると言える。また、賽夏族は山地系民族に分類できるが、北西部の比較的低い位置に居住し、漢族との交流が早い時代から行われ、日治時期には植林をさせられていたことから生活環境が大きく変化したものと考えられる。(表 1)

表 1. 原住民の概要と集落立地

種族概要	典型的集落立地
魯凱族 15,000 人 東魯凱 竹造茅葺 西魯凱 石造	屏東縣三地門郷 霧臺集落
排灣族 70,000 人 頭目・貴族 竹造茅葺 勇士・平民 木造茅葺	屏東縣春日郷 老七佳集落
布農族 45,000 人 北部 石造 中南部 木造茅葺	南投縣信義郷 人和集落
泰雅族 85,000 人 木造茅葺 竹造茅葺	新竹縣五峰郷 清泉集落
鄒族 6,000 人 木竹造茅葺	嘉義縣阿里山 達邦集落

<p>賽夏族 5,300人</p> <p>竹造茅葺 木竹造茅葺</p>	<p>苗栗縣南庄郷 向天湖集落</p> 
<p>卑南族 9,600人</p> <p>竹造茅葺</p>	<p>台東縣卑南郷 利嘉集落</p> 
<p>阿美族 157,000人</p> <p>木竹造茅葺</p>	<p>花蓮縣瑞穗郷 奇美集落</p> 
<p>達悟族 3,000人</p> <p>木造茅葺</p>	<p>台東縣蘭嶼郷 野銀集落</p> 
<p>邵族 500人</p> <p>木竹造茅葺 現在は仮設住居</p>	<p>南投縣魚池郷 日月村集落</p> 

①「山・尾根居住・狩猟採集系」

魯凱、排灣族の集落は標高が高く、急峻な隔絶した山中に立地しており、ほとんどの谷線に土砂崩れの跡が見られた。集落は尾根線上の緩傾斜地、テラス上、鞍部などに立地し、凸型斜面を利用している。これは台湾の地形が現在も隆起を続けており、その速度も速く雨の多い地域でもあるため崩落する土砂が多量に発生することが原因なのではないかと考えられる。家屋は斜面に上下数層に分か

れて配置され、等高線方向の道でつながる。生業には狩猟と採集が基本にあり、周囲の農耕地はほとんど見られない。

②「平地山麓・平野段丘居住・農耕系」

平地山麓系の民族が居住する集落は漢族の農村と非常に近似しており、生活環境も類似している。生業は農耕が基本にあり、稲作も行っているが、粟酒が名産であることを公領すると、本来は水稻栽培より陸稲や粟の栽培が中心で狩猟採集なども行っていたと考えられる。多くの集落は平野奥の山地に近い場所に立地しているが、山麓にはやや距離がある。平野ではあるが数m程度標高が高い段丘上あるいは扇状地に立地している。しかし、現存する集落は日治時期の強制移動により形成された集落であるため、本来は山麓かそれよりやや高い場所に居住していた。

③「海・島嶼居住・漁労系」

台湾本島の原住民と比較して、明らかに異なった特異な生活環境下で居住している。独特のデザインを持つ船を用いて漁労を行うとともに、離島であるために限られた耕地で水芋を芝居している。また、集落は風を避けるために地中に穴を掘った半地下構造の母屋が並ぶ独特のスタイルを持っている。山麓から海にかけて階段状の宅地があり、そのような場所に位置しているのではないかと考えられる。島嶼の生活環境に暮らす達悟族の場合、古くか火山活動があった蘭嶼において背後の山から崩落した堆積物によると思われる崖錘か扇状地に集落が立地している。そこは、水が地下にしみこんで水を保持しにくい場所であり、農地などにももともと使えない場所だったのでないかと推測する。

(2) 住居の構成

住居を建築材料別にみると、南部地域を居住地とする魯凱、排灣、布農族(一部)の「石造・石屋根」、東部海岸沿いを居住地とする卑南、阿美族、北中部の広い範囲を居住地とする鄒、邵、賽夏、泰雅、布農族(一部)の「木材+竹材・茅葺屋根」、島嶼に居住する達悟族の「木材・茅葺屋根」に分類することができる。南部地域では石が豊富で、土砂崩れによって出た石を建築材料としており、現在まで伝統的住居が残っている地域が多い。また、新しく建てる住居にも石板を使用している割合が高く、デザインは新しくなっても民族独自の住環境が継承されている。木、竹、茅草を住居に使用している民族は最も多く、「石造・石屋根」の住居に比べ、造りかえる文化や技術が発達していたのではないかと考える。また、達悟族の住居は島から採取される自然素材を多様に使い、1戸の住居には数十種類の材料が使用されているところから、最も住環境や周辺の自然を熟知した民族だったのでないかと考える。

(3) 集落移動

台湾原住民の集落移動は、17世紀初頭の漢族による平地の占領、人口増加、災害、日治時期の政府による強制移住、国民政府による漢族との同化政策による移住、の5つが大きな要因に挙げられるが、中でも日治時期の準備された土地への強制移住が現在の集落構成に大きな影響を与えていた。日本政府の「蕃社移住計画」は、旧集落からの居住空間や建築、土地利用は継承されず、各民族独自の伝統的住環境は消滅している。また、この政策は政治を獲得し管理が容易に行えるよう、数集落を1ヶ所に集住させたため、現在の原住民集落では散村型はほとんど見られなかった。阿美族や卑南族のように、山裾から平野にかけて比較的平地に近い立地条件に居住する民族の現在の集落は、山腹斜面地集落に比べ規模が大きく、数多くの散村していた集落が集められた結果だと言える。原住民集落は各時代において様々な外的要因によって集落移動を繰り返し、そのたびに居住環境が大きく変化してきた。現在の集落のほとんどが純粋な原住民とは異なる集落形態、集落立地にあり、それが今日の原住民集落として知られている。

(4)原住民の色彩環境の特性

本研究では日本色彩研究所が発行した「新配色カード199a」を用いて調査・分析を進めた。その結果各地域における色彩特徴は以下の5つに分類することができた。(図2)

①台湾島東海岸と蘭嶼島

海岸地域は直射日光が当たりやすく、海や空の青に恵まれ、明るい色彩環境となる。阿美、口葛瑪蘭、撒奇萊雅、太魯閣、卑南、達悟族の服飾は基調色に1~2色を組み合わせた明快な配色が使用されている。海岸部では白を基調色とし、アクセントカラーに黒や赤、青を好んで使う傾向がある。

②中央山脈北西部

中央山脈北西部に居住する賽夏族は東海岸に居住する民族に類似している。林業を営み湖周辺に居住する親水環境にあり、海岸部と共通して色彩感性が育ったと考えられる。

③中央山脈北部

中央山脈北部には泰雅族が居住し、織物色彩は黒や赤を基調色とし、多色糸を織り込んでいる。

④台湾中部

台湾中部の阿里山と日月潭には鄒、邵族が居住し、その服飾は赤や青、水色などの明るい色を好んで使用する。

⑤台湾南部山岳地帯

台湾島最南部の山岳地帯には魯凱、排灣族が居住し、中部の広範囲に布農族が居住する。地域の自然環境は森と岩石に恵まれ、木材や黒い石板が建築材料となっている。副食においても黒が主色で、黄、赤、緑などがよく使われている。色彩の表現方法は、面的な装飾

を好む傾向が見られ、森の深い影や黒い石板の均一な色彩が、これら諸民族の色彩感性に大きな影響を及ぼしてきた結果だと考える。

(5)原住民の色彩嗜好の時代的変遷

台湾原住民の生活の中で最も多く見られた色彩をいかに挙げ、各民族の色彩嗜好と時代的変遷について検討する。

①白と黒の配色

白と黒は古くから身近な素材で手軽に染められる色であった。服飾で白+黒の配色は2民族のみに継承されており、その他は木綿糸の輸入とともに白+紺、白+赤、白+赤+黒などの新たな配色へと変化した。

②赤

原住民社会において赤は呪術的な意味を持ち、冠婚葬祭や社会的身分の象徴として用いられていた。それが特に顕著に表れていた例に阿美族の服飾が挙げられる。阿美族は年齢階級を持つ母系社会で、首長や長老の服飾に赤が使用されていた。

③青

赤の他に最も普遍的に使用されているのが青である。魯凱、排灣族の古い服飾の中には藍染の青が見られ、藍染の技術を持っていたことを示している。

④虹色

世界の諸民族と同様に、台湾原住民も虹色に大きな魅力を感じていた。服飾には多色の色糸が施され、特に中央山脈西部に居住する民族は漢族との交流が活発で色糸が容易に手に入ることから、多様に用いられている。

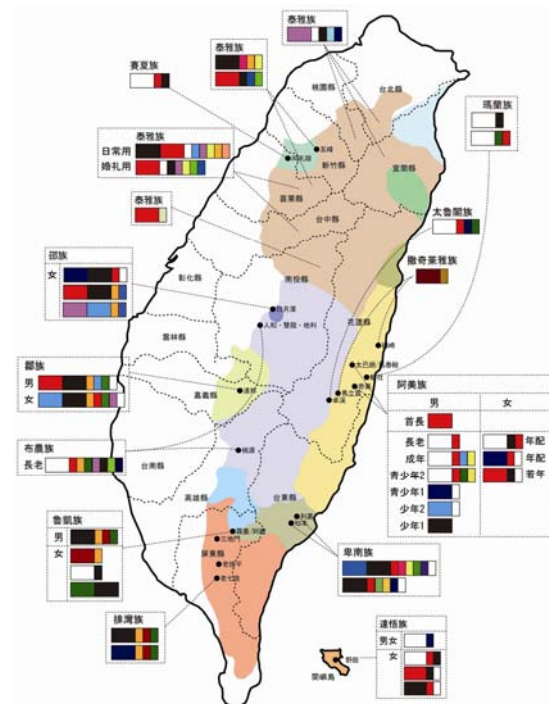


図2. 原住民の民族服飾における配色マップ

(6)原住民の文様特性

魯凱、排灣、布農、鄒、賽夏、泰雅、達悟族の文様を研究対象に、相違点と特性及び背景を明らかにし、以下の6種類に分類することができた。また、調査対象の全ての民族に共通して見られた文様は六角式、四角式、扁六角式、交差式がある。

①蛇信仰による文様

魯凱、排灣族は蛇信仰を持ち、蛇文様が伝統服飾に表現される。頭目を中心とする集団的アイデンティティの核を成す重要な文化表象である。(図3)

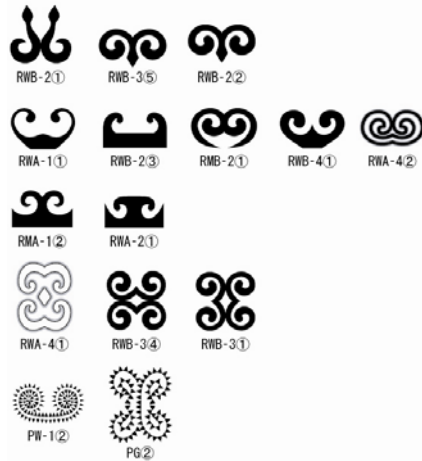


図3. 蛇文様

②蛇象徴、自然環境による波文様

波文様は世界各国の民族文化によく見られる。原住民の波文様は水波式、幾何学三角式、円波式に分けられる。(図4)

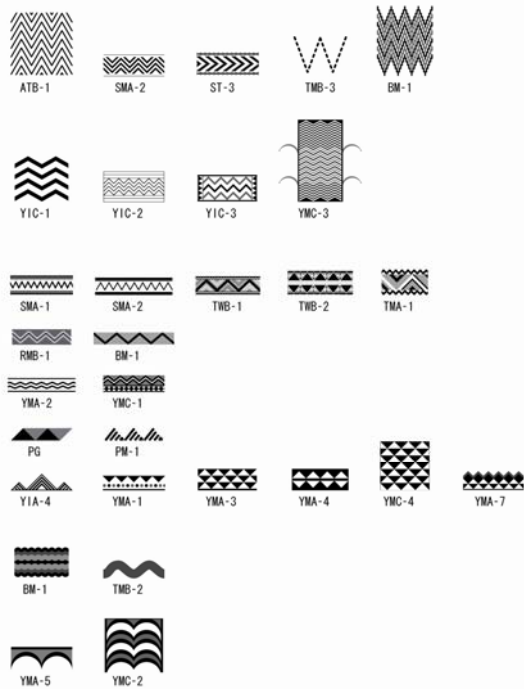


図4. 波文様

③祖霊、神話、生活風景の描写による人文様

南部、南東部の排灣、達悟族に人文様がよく見られる。人文様は単頭式、単独直立式、単独直立抽象式、単独直立連続式、人像式に分けられる。(図5)

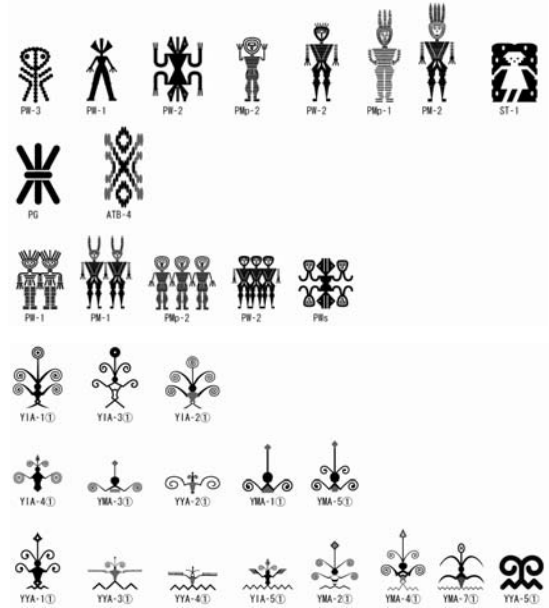
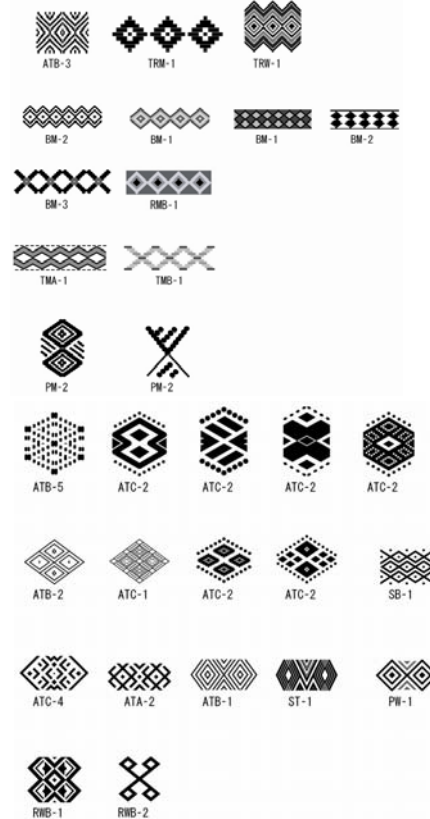


図5. 人像文様

④幾何学による六角形や菱形文様

連続の菱形文様は各族でよく見られ、一部では蛇の鱗や祖霊の目だと考えられていた。菱形文様は顔型式、眼式、班状式、網状式、卍字式に分けられる。(図6)



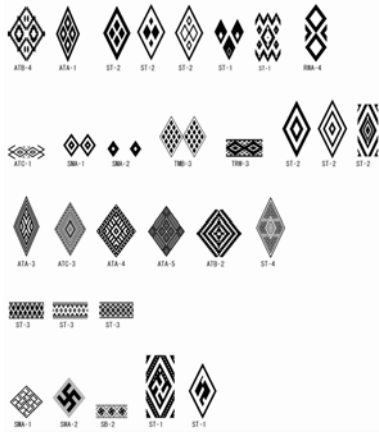


図 6. 菱形文様

⑤太陽神話、船眼による円形文様

太陽文は排灣、達悟族のみに見られた。排灣族は太陽を祖先として拝み、達悟族は太陽文を「船眼文」と呼び船の目と考えている。太陽文様は同心円式、円射式、直射式、半円式に分けられる。(図 7)



図 7. 円形文様

⑥その他

各族の文様は地域や信仰観念によりその意味性も異なる。台湾原住民の文様は南へ進むほど固有の文様が今なお現存していた。中北部では固有の文様は徐々に忘れられ、他族の文様を意味が分からないまま使用している例も少なくなかった。

(7)まとめ

本研究は、台湾原住民族 13 族の伝統的民族観を全ての現地調査を通して比較考究し再評価したものであり、現在から過去へ遡及する方法を取入れ空間・色彩・図像研究の複合的な専門領域からのアプローチを試みてきた。

空間研究では調査した台湾原住民集落の歴史、立地選定と居住形態の構成、生活環境と立地特性、集落の空間構成、住居の空間構成について考察を行った。色彩研究では、色彩環境の特性について、立地環境及び居住環境の色彩特性、服飾の色彩と配色、染織工芸について考察を行い、時代的変遷と地域特性を明らかとした。図像研究では、文様文化と図像の特性について、詳細調査を実施した 8 民族の伝統服飾の形式と種類、船装飾について地域文様図像の特性として明らかとした。

本研究の調査方法と議論された成果は台湾原住民研究の出発点として、今後、更なる探求を行っていきたいと考える。それは台湾だけにとどまらず、多くの少数民族が固有性を持続できる将来のアジアンデザイン文化への貢献と、デザイン領域を超えた民族研究の実践に還元できるものと位置づけている。

5. 主な発表論文等

- [雑誌論文] (計 2 件)
- 黄國賓・曾和英子・齊木崇人
『魯凱族と排灣族の伝統服飾にみた地方の紋様特色－霧台村と七佳村両地の紋様比較と通して－』
神戸芸術工科大学紀要、査読有り
2009年
- 黄國賓・曾和英子・齊木崇人
『台湾原住民の紋様文化と図像の特性』
神戸芸術工科大学紀要、査読有り
2009年

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

- 齊木 崇人(SAIKI TAKAHITO)、神戸芸術工科大学・芸術工学研究科・教授
研究者番号：90195967

(2) 研究分担者

- 渋谷 鎮明(SHIBUYA SHIZUAKI)、中部大学・国際関係学部・教授
研究者番号：60252748
- 黄國賓(HUAN GUO-PIN)、神戸芸術工科大学・芸術工学研究科・助手
研究者番号：50441382

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

- 曾和 英子(SOWA EIKO)、神戸芸術工科大学大学院・芸術工学研究科・非常勤講師
研究者番号：80537134
- 長野 真紀(NAGANO MAKI)、神戸芸術工科大学大学院・芸術工学研究科・博士課程
- 陳 啓仁(CHEN CHI-JEN)、國立高雄大學・都市發展與建築研究所・助教授
- 洪 明宏(HUNG MING-HONG)、國立高雄師範大學・視覚傳達設計研究所・教授